

近代英語協会第 27 回大会

— シンポジウム・研究発表 —

日時：2010年5月28日（金）

会場：京都大学附属図書館3階 ライブラリーホール

（正門から斜め左方向に附属図書館があります。正面玄関から入り、エレベーターで3階にお上がり下さい。）

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL：075-753-7531（代）



交通手段は、裏表紙に記載してあります。

近代英語協会事務局

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1

広島女学院大学大学院言語文化研究科 英米言語文化専攻米倉研究室内

協会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mea/index.html>

（電話：082-228-0386（大代表） 振替口座 00810-9-5821）

「there 構文の史的発達」

司会：藤原保明（聖徳大学教授）

講師：藤原保明（聖徳大学教授）

講師：家口美智子（摂南大学准教授）

講師：西原俊明（長崎大学教授）

シンポジウム趣意書

聖徳大学教授 藤原保明

現代英語の **there** 構文は史的発達の結果である。この構文を古英語期から通時的にたどると、それぞれの構成素に対する制約が強められていったことがわかる。たとえば、**there** については音形と機能が、動詞については **be** 動詞から他の自動詞（および他動詞）へと種類が、主語名詞句については名詞または情報の種類が、また、**there** 構文と共起する前置詞句については生じる位置などがそれぞれ制限されてきた。それゆえ、今回のシンポジウムでは、古英語から現代英語にかけてこの構文の構成素に課せられた制約をいくつか取り上げ、具体的に検討してみたい。藤原講師は 1400 年頃の **there** 構文の各構成素に対する制約について、家口講師は存在文の **there** の名詞化について、西原講師は現代英語の **there** 構文と共起する前置詞句によって生じるさまざまな制約について考察する。

「there 構文の史的発達の要因」

聖徳大学教授 藤原保明

there 構文は古英語期に成立したはずであるが、1400 年頃の (1), (2) のような **there** は直示的なものがほとんどであり、虚辞の例はきわめて少ない。一方、(1), (2) と同じく古英語期以来の X+V+S という語順を示す (3) のような例も多く見られる。それゆえ、**there** 構文は古英語期から約 4~500 年間はほとんど変化せず、その後急速に発達したことになる。本発表では 1400 年頃の **there** 構文を主に検討し、この構文の発達の要因等を解明したい。

(1) *Theris an arm of the see that is callyd the Bras of Seynt George.*

(2) *Theris also in the cete of Chayre, that is in the lond of Egipt, a common hous.*

(3) *On that other syde of the temple is a roche that was wone to ben callid Mariak.*

「Existential There の Nominalization について」

摂南大学准教授 家口美智子

本発表は、存在文における existential there の Nominalization について考察する。Breivik (1981) は Lyons (1975, 1977) の existential there は locative there より派生してきた non-proximal な副詞であるという仮説に対して、①派生があるとすれば少なくとも古英語以前に起こった、②それは英語が TVX 型の言語から SVO 型に変化する中で there が主語であると再解釈され名詞としてのふるまいをしているとして次のような現象を指摘している。

- (1) There appears to be trouble. (Subject Raising)
 - (2) He expected there to be trouble. (Object Raising)
 - (3) Has there been an accident? (Questions)
 - (4) There has been an accident, hasn't there? (Tag Questions)
 - (5) Had there been an accident, I wouldn't have written before. (Conditional Clauses)
- 以上 Breivik (1981)

本発表では OED やその他のコーパスを用いて上のふるまいの歴史的な Nominalization の検証を行い、locative there との比較を行う。

「there 構文の非対格性」

長崎大学教授 西原俊明

本発表では、英語の There 構文のうち、(1)(2)に挙げる主語外部 There 構文(There-V-PP-NP の連鎖)と主語内部 There 構文(There-V-NP-PP の連鎖)に焦点をあて、これまでの研究で明らかになった言語事実、及び主要な研究上の観点を取り上げて考察する。

- (1) a. There walked through passport control a well-known actor. (Lumsden 1988:38)
b.* There walked a well-known actor through passport control. (Lumsden 1988:39)
- (2) a. There merged at the meeting several new important facts.
b. There emerged several new important facts at the meeting.

考察上の観点は、次に挙げる通りである。

- i) 主語外部 There 構文と主語内部 There 構文に生起する動詞は如何なる種類の動詞か。
- ii) (1a)(1b)の交替を許さない動詞に課せられた制約とは如何なるものか。
- iii) 名詞句には(右方)移動が適用されているか。
- iv) 名詞句に付与される格とは如何なるものか。
- v) 上記の There 構文に課せられる機能的制約とは如何なるものか。

(i)から(v)の観点に関わる先行研究にふれながら、There 構文の特徴を明らかにするとともに、関連するほかの There 構文にも言及したい。

司会 愛知学院大学准教授 前田 満

1. 「Reek の deterioration: Shakespeare の Sonnet 130 を例として」

津田塾大学大学院 磯崎 聡子

reek の意味は「蒸気が出る」から好ましくない方向に変化し Swift (1710) 以降に「悪臭を放つ」の意味も持つようになった(OED2)。しかし、Shakespeare の Sonnet 130 の reeks の解釈は学者によって(1)「中立的なにおいを発する」、(2)「においを発する」だが中立的ではないことをほのめかす解釈、(3)「悪臭を放つ」、の3つに分かれる。MED の reek の定義、BNC と COCA による現代英語の reek の対象調査、Shakespeare の他の作品における 16 の派生語を含む reek の調査、Sonnet 130 の構造(強い対比)と Sonnets 全体の中での 130 の位置づけ(道化)を通して line 8 の reeks の解釈は「悪臭を放つ」が妥当であることを考察し、reek における deterioration は Shakespeare の時代にすでに始まっていたこと示す。

2. 「シェイクスピアにおける法助動詞 SHALL/SHOULD、WILL/WOULD の意味と機能」

浜松医科大学准教授 中安 美奈子

本研究の目的は、シェイクスピアにおける法助動詞 SHALL/SHOULD、WILL/WOULD を意味論的、語用論的観点から分析することである。Gotti, et al. (2002) 等の先行研究では分析が不十分であった、モダリティと言語行為とを明確に区別し、かつ関連づけながら、それぞれの法助動詞に関するこれら要因の分類を試みた。本発表では、どの程度文法化の段階がすすんでいるのか、義務、意志といった本来の語彙的意味が法助動詞の意味・機能にどのように反映されているのかを示す。また、ダイクシスの観点から、近称 (SHALL・WILL)・遠称 (SHOULD・WOULD) の違いが意味・機能にどのような影響を与えているのかを考察する。

司会 慶應義塾大学教授 児馬 修

1. 「派生接頭辞の範疇選択特性に関する考察」

筑波大学助教 長野 明子

本発表の目的は、「範疇を変える接頭辞」の範疇選択の特殊性を共時的及び通時的な視点から考察することである。PEの派生接頭辞 *be-*, *de-*, *dis-*, *en-*, *out-*, *ur-* は、派生接頭辞の一般的特性及び右側主要部の法則に反し、基体の範疇を変えるとされる (e.g. [be[fool]N]v)。これに対し、本発表では、これらの接頭辞の基体は N や A ではなく転換 V である (e.g. [be[[fool]N]v]) という仮説を提案し、主に ModE と PE の実例に基づいてこれを証明する。具体的には、N/A→V 接頭辞付加の諸特性と発達は、V→V 接頭辞付加と N/A→V 転換それぞれの特性及び発達を介して説明できることを示す。

2. 「英語人称詞縮約の通時的変遷と通言語的異質性について——一人称詞を事例として——」

沖縄国際大学准教授 柴崎 礼士郎

本研究では、英語人称詞の縮約 (contraction) あるいは接語化 (cliticization) の通時的変遷を特に一人称詞に絞って考察し、縮約・接語化の在り方が通言語的に異質であることを提唱する。構成要素間の結び付きを示す手段として、通言語的に「主要部標示」(head-marking) と「依存部標示」(dependent-marking) が知られている (e.g. Nichols 1986)。主語・目的語は一致 (agreement) の形などで動詞に形態標示される主要部標示が多く、英語の場合も一・二人称の事例では初期近代英語期頃まで確認できる。しかし、1500年代以降主要部標示 (*ichil* (< *ich* 'I' + *wille* 'I will')) から依存部標示 (*I'll* (< *I* + *will*)) へと形態依存関係が逆転したことを統計的に示す。この言語変化の背景には、音韻的・談話情動的・社会的など複数の要因がしている。本研究の目的は、英語史上に特有で且つ通言語的に特異な本現象を考察し、言語変化の言語内のおよび言語外的要因を解明することである。

References

Nichols, Johanna. 1986. Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* 62 (1), 56-119.

司会 関西外国語大学教授 菊池 繁夫

1. 「ME から ModE における説得の技法」

埼玉学園大学准教授 片見 彰夫

読者を信仰の道へ誘うため、説得という目的を果たすことを重要視する宗教散文の文体に着目し、語（句）の繰り返し表現や、ワードペアと呼ばれる *and* による語連結、そして談話標識がどのような修辭的効果をもたらしているのかを考察する。Chambers (1932) では Richard Rolle の作品に英語散文の伝統を継承しているという重要な位置付けを与えている。本発表では Rolle と同じ 14 世紀に宗教散文を著した Walter Hilton, Julian of Norwich, Margery Kempe にも着目し、それらの文体的特徴が近代英語期に現れた欽定訳聖書や、Shakespeare 作品にいかにより用いられているのかについて探る。

2. 「綴り字改革運動を支持した 19 世紀の言語学者たち」

京都府立大学准教授 山口 美知代

1842 年に設立された言語学会 (Philological Society) で、1880 年代半ばまでの間に、英語綴り字改革の問題がどのように取り上げられ、議論されたかを、英語学史・言語学史の観点から考察する。

19 世紀イギリスの綴り字改革運動を支えたのは、初等教育関係者と言語学者であった (cf. 山口 2009, 2010)。本発表では、まず、言語学会の会員たちが綴り字改革論にどのように取り組んだのかを、運動全体の流れのなかに位置づける。そして、彼らが初等教育関係者とどのように連携し、また、どこで意見を異にしたのかを明らかにする。

分析の中心となるのは、綴り字改革をどう考えるかという言語学者たちの言説 (論考、書物、小冊子、書簡など) である。表音式綴り字を支持する論の背後にある、比較言語学・歴史言語学研究や、音声学研究の影響を考える。

綴り字改革を支持した言語学会員 (Robert Latham, Friedrich Max Müller, Henry Sweet, Alexander Ellis, Walter Skeat, Archibald Sayce) らの言説と、反対した会員の言説 (Edwin Guest, Richard Chenevix Trench) を対比させて、19 世紀の言語学者たちの間で影響力のあった言語観、英語観、綴り字観を考える。

(参考文献)

山口美知代 (2009) 『英語の改良を夢みたイギリス人たち—綴り字改革運動史 1834-1975』東京：開拓社。

山口美知代 (2010) 「読み書き教育効率化と標準発音普及を目指して—19 世紀イギリスの綴り字改革論」『識字と読書—リテラシーの比較社会史』松塚俊三・八鍬友広編、pp. 273-97、京都：昭和堂 (2010 年 2 月刊行予定)。

3. 「陥穽—英語学における—では？」

元神戸学院大学教授 菅 沼 惇

本発表では、分詞構文の諸状・情況の史的縦横観察・研究中、遭遇の諸「陥穽？」を論述する。其一：「分詞構文は副詞的構成要素である」は OE 期来の通念、斬新 Callaway 理論もの；拙案は「補述」へ止揚する。 其二：ME 期で分詞構文意味用法起源で『英語史 II』（大修館）『英語史総合年表』（研究社）に疑念。 其三：MnE 期：1. 『英語史 IIIA』（大修館）：一般型構文無記述、「準独立分詞構文：These growing feathers pluck'd from Caesar's wing / Will make him fly an ordinary pitch, (Caes. I.i.77-8)(頭位に置かれた分詞節の主語が上位節の主語でもある) (拙 / 入れ) は如何？ 2. 認知言語学は如何か!？ 3. 『英語史 IIIB』（米語史）が不記載! 其四：PE 期：不在。 別件で、色々の内 1. Radford, A. (1981)の陥穽は？



附属図書館外観

(<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/image/library.jpg>
を使用させていただきました。)

交通手段

| 鉄道駅 | 利用交通 機関等 | 乗車バス停 | 市バス系統 | 市バス経路 | 本学までの 所要時間 | 下車バス停 |
|---------------------|-------------|---------------|--------------|-------------------|---------------|-----------------|
| JR／近鉄 京都駅から | 市バス | 京都駅前 | <u>206系統</u> | 「東山通 北大路バスターミナル」行 | 約35分 | 京大正門前 又は 百万遍 |
| | | | <u>17系統</u> | 「河原町通 錦林車庫」行 | 約35分 | 百万遍 |
| 阪急 河原町駅から | 市バス | 四条河原町 | <u>201系統</u> | 「祇園 百万遍」行 | 約25分 | 京大正門前 又は百万遍 |
| | | | <u>31系統</u> | 「東山通 高野・岩倉」行 | 約25分 | 京大正門前 又は百万遍 |
| | | | <u>17系統</u> | 「河原町通 錦林車庫」行 | 約25分 | 百万遍 |
| | | | <u>3系統</u> | 「百万遍 北白川仕伏町」行 | 約25分 | 百万遍 |
| 地下鉄烏丸線 烏丸今出川駅から | 市バス | 烏丸今出川 | <u>203系統</u> | 「銀閣寺道・錦林車庫」行 | 約15分 | 百万遍 |
| | | | <u>201系統</u> | 「百万遍・祇園」行 | 約15分 | 百万遍 又は 京大正門前 |
| 地下鉄 東西線 東山駅から | 市バス | 東山三条 | <u>206系統</u> | 「高野 千本北大路」行 | 約20分 | 京大正門前 又は 百万遍 |
| | | | <u>201系統</u> | 「百万遍 千本今出川」行 | 約20分 | 京大正門前 又は 百万遍 |
| | | | <u>31系統</u> | 「修学院・岩倉」行 | 約20分 | 京大正門前 又は 百万遍 |
| 京阪 出町柳 | 徒歩 市バス | (東へ) 出町柳駅前 | | | 約20分 | |
| | | | <u>201系統</u> | 「祇園 みぶ」行 | 約10分 | 百万遍 又は 京大正門前 |
| | | | <u>17系統</u> | 「錦林車庫」行 | 約10分 | 百万遍 |

会場地図と交通手段は、京都大学公式ホームページの次のサイトを利用させていただきました。厚く御礼を申し上げます。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_y.htm